

復活節第3主日

福音朗読 ルカ 24・35-48

2024.4.14 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音はルカによる福音からとられていて、復活したイエス様をご自分の身体を弟子たちに示した、そしてそこで食事をされたっていうことが出て来ました。復活したイエス様は身体を持っているよ、ということを強調しています。

どうしてそこまで身体にこだわるのかということは、今のわたしたちからするとちょっとピンとこない面もあるのですけれども、ルカの福音書が誰に向かって語り掛けているのかという時代背景を考えると、少し見えてくるような感じです。

ルカの福音書は、ユダヤ教の人に向かって、というよりは、当時のユダヤ教徒ではない人たち、当時の世界のギリシアやローマの文化の中にある人たちに向けて、イエス様のことを伝えるために書かれたっていうふうに言われています。その当時の支配的だった考え方は、この身体っていうのは牢獄で、魂は不滅なんだけど、身体の牢獄から解放されていくっていうことが、人間にとっての本当の幸せであって、知恵ある者はこの世のいろんな物質的なことには捕らわれないっていう、そしてやがて肉体が死んだときにはそこから解放されて、魂が自由になるっていう考え方があったわけです。

でも、わたしたちが信じているのはそういうことではありません。神様が与えられたものをもう一度完全に、そしてもっと素晴らしい形でいただく。神様が立ち上がらせてくださる、その恵みを復活と言う、それを信じているんだということを強調したいわけなんです。

それは、さらに広がって、死んだあとの話、死んだ後がどういう状態になるかということだけではなくて、生きている今のわたしたちにとっても、神様の救いの対象というのは心の中の話だけではなくて、身体も含めた、物質的なことも含めた全部である。全部を通して神様がわたしたちを救いへと招いていらっしゃるということになるわけです。「生活上のことに思い煩ったりそういうのはくだらないんだよ。心の中で神様と繋がっていけばいいんだ」ということを宣べ伝えているのではないということです。

昔の聖歌で「世のもの忘れて 天のみ慕^{しと}う」という歌詞が出て来るのがありますけれども、それがともすると「今のこの世の生活はどうでもよくて、死んだあとに天国に行くってことだけを待ち望んでいます」というような意味で捉えられることが多いけど、それは駄目です。キリスト教の信仰を反映しているとは言えません。ただ、「世」というのは、聖書的な背景でいけば、神様と離れた人間の現実、

「天」というのは神と共にある人間の現実っていう、そういう意味なんだって理解しているならば、その歌詞も、神と離れているのではなくて、神と共に生きるっていうことを求めるんだっていうふうな意味になりますけど。

つまり、わたしたちはみんなそれぞれ、より良い生活をしたい、あるいは自分の子どもたちはより良い人生を歩むように、いろいろ与えられるものはちゃんと与えていきたいっていう親の思いだったり、あるいは身体が病気的时候には「治りたい」、そういうふうに思う、またそのためにいろいろする、そういうこともすべて、それは信仰とは関係ないってことではなくて、やっぱり神様からいただいたものを通してより良いものに歩んでいこうとする、人間の当然の歩みであって、それを教会やまた神様がないがしろに思っているのではないんだということに繋がってくるんです。今日の「復活されたイエス様は身体を持っていた」ということを強調する聖書の記述はそういうことになります。

1960年代にカトリック教会が「自分たちは一体何なのか」ということを捉え直そうとした第二バチカン公会議——ときどき教皇様や大司教様の言葉とかに出てきますね——の集大成である『現代世界憲章』っていう文章があります。

で、その『現代世界憲章』は「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、とりわけ、貧しい人々とすべて苦しんでいる人々のものは、キリストの弟子たちの心の中に反響を呼び起さないようなものは一つもない」って、そういう書き出しで始まっているんです。みんながそれぞれ「より良い生活になりたい」あるいは「この苦しい身体の病から治りたい」って思ってること、それも含めて、教会が「くだらないんだよ」って思うことは何もないんだということ強調されているわけです。

ですから、わたしたちは心の中で安心だけを求めているのではないこと、またいろんな直接的な物質的な教会の支援活動とかいろんな形の奉仕、社会における奉仕も、それは付随的なものというのではなくて、信仰の本質からくる、教会の典礼と同じように大切にされなければならない活動であると言わなきゃならないわけなんです。

でも、一方で、唯物主義的な、そのいろんな生活のことだけに奉仕するっていうのが信仰なんだ、教会なんだというふうに、心を通してイエス様に出会っていくことを忘れて、いろんな生活の向上に奉仕するっていうことに単純化してはまたならない面もあります。なぜならば、今日出て来る、復活して身体をもったイエス様はご自分の意志によって十字架を受け入れ、そして死を通して復活された^{かた}方です、っていう聖書の記述——今日のところの前の部分——もやっぱり大切に、って言うか、それこそ大切にしなければならぬからです。

わたしたちが、いつも自分の望んでいる通りに人生が成り、自分の望んでいるようなことを手に入れることが良いのだ、というその考え方だけに留まるならば、イエス様が本当にわたしたちを導こうとしている歩み、この苦しみそのものに意味を

見出し、そしてそれを通して新しいものの見方、新しい自分自身に変えられていくっていう歩みに対して心を閉じてしまう、そこに意味を見出せないことになってしまう。それは、順調にいつてることだけが人生の大切な瞬間なんだっていうようなものに陥ってしまうわけです。

どんな時も、喜びも希望も、そして苦しみも悲しみもすべて神様が導いてくださるということを信じる時に、もちろん自分が望んでることが実現するように努力することそのものも貴い、それを待ち望むことをないがしろには考えられないけれども、どうにもならない十字架を避けるだけではなく、それを通してイエス様と出会おうとする、その思い、それが信仰です。特に、苦しみや思い通りにならないこと、いろいろな苦難の中にもわたしたちを変えていく、新しい世界に導く意味を見出し、そしてそのように成長させられていく恵みがある、ということなんだと思うんです。

わたしたちが日々の、今いろんな形で苦勞している日常生活を決して神様は「くだらないこと」として退けられているのではないんだと、「そんなことじゃなくて心の中のことを見つめなさい」と言っているのではないんだと、でも、その日常生活を通して出会おうとされる、死と復活を通して身体を持ってわたしたちに出会おうとされるイエス様に出会うとは一体何か、イエス様と共に歩むとは何か、をいつも心の中に問い続けながら、それぞれの日常、またお互い同士の助け合いがその上にあったら良いなあと思います。

今日も、心や言葉だけではなくて、御聖体っていう形を通して、物となってわたしたちの中にいらっしゃって出会おうとされるイエス様のみこころを、わたしたちの生活の中でもいつも受け取り続けることができますように、イエス様との出会いが深められていく、その恵みを願いながら、このごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>